特定希少野生動植物指定案の概要

種名と写真	解　　説
カスミサンショウウオ （両生類：有尾目 サンショウウオ科） 	奈良県版レッドデータブック：絶滅寸前種 ①種の概要：日本固有種。全長は80～100㎜程度、背面は暗褐色から黄土色をしており、尾の上と下縁に黄色い線がある。里山的環境に生息し、湧水部の小さな水路や水たまりなど止水域で繁殖する。 ②生息状況：岐阜県以西の本州、四国、九州の広範囲に分布する。本県でもかつては、奈良盆地の丘陵や山麓などに広く分布していたと考えられるが、生息地や繁殖地が激減し、春日山や矢田丘陵など県北部でわずかに分布しているのみである。 ③希少要因：分布域と人間の生活領域とが重なることから、宅地造成や雑木林の伐採、水田の荒廃などのため生息地、繁殖地が消滅したことによる。かつての大量の農薬散布も要因の一つと考えられる。
ナゴヤダルマガエル （両生類：無尾目 アカガエル科） 	奈良県版レッドデータブック：絶滅寸前種 ①種の概要：平均体長はオス56㎜、メス63㎜。トノサマガエルによく似ているが、足が短くダルマのような体型にちなみ名付けられた。トノサマガエルは腹面が白色だが、本種は灰黒色の雲状紋が出ることが多い。 ②生息状況：本州（東海、近畿、山陽）、四国に分布。低地の湿地や湿田など、年間通じて水環境が維持される場所を好み、そこから離れることなく生息する。本県でもかつては、奈良盆地に広く分布していたと考えられるが、現在、その周辺域の山麓など数ヶ所に生息するのみである。 ③希少要因：宅地開発や農業形態の変化、生活雑排水による水質汚濁などによって生息環境が消失したことによる。
ニッポンバラタナゴ （魚類：コイ目コイ科） 	奈良県版レッドデータブック：絶滅寸前種 ①種の概要：全長約5㎝。体高は高く、口ひげはない。測線は不完全であり、体側上に暗青色の縦帯がある。産卵期のオスは赤褐色を帯び、腹部外縁と腹鰭は黒くなる。メスは長い産卵管を伸ばし、二枚貝の中に産卵する。 ②生息状況：かつては奈良盆地のため池などに広く生息していたと考えられるが、現在確認されているのは奈良公園内の1地点のみ。本県の他、大阪府東部、香川県北部、九州北中部のみで確認されており、本県は分布の東限に当たる。 ③希少要因：最大の要因は、本種と亜種関係にある外来種タイリクバラタナゴとの競争、交雑による。ブラックバスなどの魚食性外来魚による捕食の影響も無視できない。ため池の管理放棄による水質など生息環境の悪化も危惧される。

種名と写真	解　　説
コサナエ （昆虫類：トンボ目 サナエトンボ科） 	奈良県版レッドデータブック：絶滅寸前種 ①種の概要：日本固有種。腹長27～32mm程度の小型のトンボで、山間部の挺水植物や浮葉植物が繁茂する池や、湿田・休耕田や湿地に生息する。成虫は5月下旬から6月中旬に発生する。 ②生息状況：北海道から本州にかけて分布するが、近畿地方では分布が局限される。本県でも下北山村の2つの産地に限って生息し、他からは知られていない。 ③希少要因：北方系の種でありもともと稀産である。生息地周辺の森林や水質などの生息環境悪化や、肉食性外来魚であるブラックバス（オオクチバス）による幼虫であるヤゴの捕食の影響が考えられる。
ヒメタイコウチ （昆虫類：カメムシ目 タイコウチ科） 	奈良県版レッドデータブック：絶滅寸前種 ①種の概要：体色は光沢が鈍い黒褐色で、体長は20mm程度。尾端にある呼吸管は3mm程度で、タイコウチほど長くないために水中生活には適していない。湧水のある浅い湿地や休耕田に生息し、昆虫などを捕まえて体液を吸う。 ②生息状況：静岡県から兵庫県にかけての本州、四国の香川県に分布し、紀伊半島では和歌山・三重両県から生息が確認されている。本県では、県西部の五條市・大淀町のみで確認されており、分布域が非常に狭く、生息個体数も少ない。 ③希少要因：分布が局所的であることから、開発などによる生息環境の減少や悪化が考えられる。また、湧水の枯渇や維持管理の不足などによる水環境の消失も考えられる。
ヒメイノモトソウ （シダ植物： イノモトソウ科） 	奈良県版レッドデータブック：絶滅寸前種 ①種の概要：常緑性のシダ。イノモトソウに似ているが、葉の中軸に翼がなく、側羽片は1～2対（まれに3対）で細長く、幅5mm以下である。本県の川上村が、本種のタイプ産地（新種として発表されたものが採集された地点）である。 ②生育状況：暖温帯域の石灰岩上に着生し、本県と三重県のみに分布していたが、三重県の生育地は台風で消失した。本県では川上村に分布しているが、自生地、個体数ともにきわめて少ない。 ③希少要因：もともと稀産であるが、国道の拡幅工事によって自生地のほとんどが失われた。また、本種とは知らずに引き抜かれたり、周辺の植栽木の成長に伴い陽が当たらなくなるなどの環境の変化も危惧される。

種名と写真	解　　説
オオミネイワヘゴ （シダ植物：オシダ科） 	奈良県版レッドデータブック：絶滅寸前種 ①種の概要：常緑性のシダ。イワヘゴに似ているが、羽片の切れ込みが深く、羽片基部では羽片の中脈まで切れ込む。胞子のう群は羽軸の両側に羽軸寄りに1列に並ぶ。 ②生育状況：暖温帯域の森林に覆われた渓流岸の斜面や林縁に生育する。自生地はきわめて少なく、中国、ヒマラヤ地方に分布するが、日本では本県の十津川村の1ヶ所のみである。下北山村と川上村の自生地については、すでに絶滅したと考えられる。 ③希少要因：もともと稀産であり、三重県の自生地は台風水害、シカによる食害で消失した。本県の自生地も、道路拡幅や森林伐採による消失が危惧される。またシカによる影響も注視する必要がある。
キレンゲショウマ （種子植物： ユキノシタ科） 	奈良県版レッドデータブック：絶滅寸前種 ①種の概要：高さ100cm内外になる大型の多年草。葉は手のひらのように浅く切れ込み、長さ、幅ともに10cm程度で、下部のものは長い葉柄がある。淡黄色でラッパ状のやや大きな花を7月から8月に開く。 ②生育状況：紀伊半島、中国、四国、九州の深山にまれに生育する。産地が冷温帯の石灰岩地に限られ、水はけがよい岩れきの多い落葉樹林内に生育する。本県でも天川村や川上村など産地が限られ、個体数も少ない。 ③希少要因：花が美しいので、登山者（特に山草業者や愛好家）による採取で激減した。また、シカによる食害が激しいことも大きな要因である。
カツラギグミ （種子植物：グミ科） 	奈良県版レッドデータブック：絶滅寸前種 ①種の概要：近畿中央部の特産種。落葉低木。葉は楕円状の卵形で、先端は尾状にとがり、鱗片がなく、全面に星状毛が生えている。果実はやや大きく広楕円形で、長さ1cm程度になり、夏に紅く熟する。 ②生育状況：京都府、大阪府にも生育するが、本県が産地の大部分を占め、分布の中心である。本県の産地は、大和高原の一部、三輪山、竜門岳、葛城山、金剛山に限定され、全体で数十株しか確認されていない。 ③希少要因：もともと稀産であるが、全般に樹勢が弱いため、植生の遷移などで周辺の他の樹木に覆われると枯死することが考えられる。

種名と写真	解　　説
カワゼンゴ （種子植物：セリ科） 	奈良県版レッドデータブック：絶滅寸前種 ①種の概要：紀伊半島南部の本県、三重県、和歌山県のみの特産種。川岸の岩場に生育する渓流沿いの植物で、草丈が100cm程度にもなる大型の草本である。イヌトウキに外見が似ているが、葉の表面は濃い緑色で光沢があり、小葉の中肋上に毛がある。果実は楕円形で、基部が凹入しない。 ②生育状況：三県にまたがる瀞八丁付近の北山川川岸に分布する。やや湿った岩の割れ目の、増水時には流水に洗われる環境に生育しており、個体数は少ない。 ③希少要因：もともと稀産であるが、近年、シカによる食害で個体が貧弱になるだけでなく、確認できる個体数も激減している。
ニセツクシアザミ （種子植物：キク科） 	奈良県版レッドデータブック：絶滅寸前種 ①種の概要：高さ40～140cm程度の多年草。九州の山野に普通に生育するツクシアザミによく似ているが、四国山地の標本に基づいて、2006（平成18）年に新種として発表された。ツクシアザミと異なり、総苞が筒状で、粘性のある真っ直ぐな腺を有する。さらに総苞片は初め直立するが、その後そり返る。 ②生育状況：本県でも1983（昭和58）年に発見され、同定されていなかったが、最近になって本種であることが確認された。大台ヶ原の西大台地区の沢沿い草地に自生し、ドライブウェイ沿いでも見られるようになったが、個体数は少ない。本県は分布の東限に当たる。 ③希少要因：もともと確認された個体数が少ないが、近年、シカによる食害がひどく、消滅のおそれがある。
ツクシガヤ （種子植物：イネ科） 	奈良県版レッドデータブック：絶滅寸前種 ①種の概要：日本固有の多年草。短い根茎があって株をつくり、高さ100～120cm程度になる。葉は線形で長さ30～70cm。茎の先端に40～50cmの円錐花序をつけ、花序の枝は細い。花の構造は特異で、小穂は包頴がなく基盤が伸長した小柄という部分を持つ。花期は8～10月。 ②生育状況：本県、秋田県、山形県、福井県、兵庫県、九州に隔離分布する。本県の産地は天理市内の1ヶ所で、個体数もきわめて少ない。ヒノキやアラカシなどに囲まれた、小さな池の縁に数株生えていたが、徐々に減少している。 ③希少要因：もともと稀産であるが、周辺の樹木が繁茂するなどの植生の遷移で、自生地に陽が当たらなくなり、生育環境が悪化することが危惧される。